

ブライアン・ボーマン

◆——ユーフォニアム奏者／元ノーステキサス大教授



Brian Bowman

1946年、アイオワ州生まれ。ミシガン大学で学士号、修士号を取得、アメリカ・カソリック大学で博士号を取得。1970～74年にアメリカ海軍バンド、アメリカ軍楽隊200年記念バンドを経て1976～91年アメリカ空軍バンドのソロユーフォニアム奏者。1976年にニューヨークのカーネギーホールでユーフォニアム奏者として初めてリサイタルを開催し、この楽器の魅力と可能性を多くの人に伝えた。以来、ソリスト、教育者としてユーフォニアムで世界をリードする存在になり、世界各国で数多くのコンサートやマスタークラスを行っている。1999年からテキサス州のノーステキサス大学で教授として指導にあたり、2018年5月に同職を退いた。

テノール歌手のようなこの楽器 本来の音を取り戻したい

ファルコーニの情熱、ヤングの深み、ブラッシュの滑らかさをミックスした私の音

昨年ノーステキサス大の教授職を退き、悠々自適の新しい生活を送るボーマン氏に今だから聞いた楽器の話、理想として来た音……

●聞き手 —— 染野真澄 (ユーフォニアム奏者) Masumi Someno

協力：岩満貴大 (ユーフォニアム奏者) 撮影：島崎信一 記事協賛：株式会社グローバル

——初めて手にしたユーフォニアムはどんな楽器だったのですか？

ボーマン パンアメリカン製のバリトンでした。スクールバンドのディレクターをしていた父が、ある日、家に持ち帰ったんです。私が9歳か10歳のとき。ちなみに、その前にやっていたのはクラリネット。その前は太鼓！(笑) ピアノは7歳から始めていました。

——その後はどんなユーフォニアムを？

ボーマン 小学生のころはキングの3バルブ、フロントベルの楽器。8年生(日本の中学2年生)の時にベッソンのフロントアクションの3バルブで、コンペなし、ユーフォニアム・シヤンクの楽器に替えました。どれも学校の備品です。その後、古いホルトンの4バルブのダブルベルのユーフォニアムを自分で初めて購入しました。

——ダブルベルは当時、普通の楽器だったのですか。

ボーマン もう珍しかったですよ。楽器店で中古を買ったんです。150ドルで。他は高くても手が出ず、私にはそれが限度でした。1960年に購入したこの楽器はまだ持っています。

その翌年、高校生の時でしたが、父がミッドウェスト・バンドクリニックでベッソンの4本バルブのコンペ付きの楽器を買ってくれました。あの頃、コンペセイティング・システムを搭載した楽器はそれしかなくて、その後の大学4年間と、軍楽隊に入ってから3年間はその楽器を使い続けました。途中でベッソンから新しく出たソヴェリン・ラージベルを試したりもしたけれど、私には合わなかった。結局、1977年1月に初めて楽器の開発に携わり、ウィルソンを手にするまで、ずっとこの楽器を使い続けました。

ウィルソン・ユーフォニアム開発記

——ウィルソンの開発では、最初どんなことを依頼されたのですか。

ボーマン 最初に依頼を受けたのはウィルソンからで

送られて来たウィルソンのプロトタイプを念入りに試奏し、感想を3ページにわたるレポートに書いて送った。

はなく、アメリカのDEGコーポレーション(ゲッツェン傘下のメーカー。ゲッツェンはウィルソンの米国代理店)です。その頃から私は毎年ミッドウェストのクリニックスに招かれていた。たしか1974年だったと思うけれど、DEGのブースに立ち寄ったら、フレッド・マルザンというテューバ奏者が開発したフロントアクション4バルブのテューバに似た形のユーフォニアムがあったんです。吹いてみたら、自分のベッソンに似た吹き心地だった。で、すぐに、「サンプルを1台送ってほしい」とお願いした。

ところが、届いた楽器はブースにあったプロトタイプのものでなく、仕上がりも良くなかった。それでコメントも付けずに送り返しました。翌年、DEGから今度はウィルソンのプロトタイプが送られて来ました。マルザンのテューバに似たものではなく、ベッソンのようなフロントアクション4バルブの楽器。吹奏感ではDEGのブースで吹いたマルザンによく似ていた。それで念入りに試奏し、改良すべきポイントをも3ページにわたるレポートにして送ったんです。

1つ目の問題は、当時のコンペセイティングの楽器は、どれも4番管のボアサイズが急に大きくなっていて、音色が顕著に変わってしまう傾向にあったこと。4番管のボアをテーパー状にしたらだんだん広がって行ったらどうか、と具体的かつユニークな提案をしました。

2つ目の問題は、送られて来たプロトタイプは、レガートはとも滑らかにかかるものの、アーティキュレーションがクリアに出なかった。そのために、楽器全体のボアサイズを少し見直してアーティキュレーションの向上を図ったらどうか、と書きました。

3つ目は楽器自体の構造の問題。どこにどんな角度でリードパイプを付けたらいいとか、楽器が構えやすくなるような細かなレイアウトの提案をしました。

とはいえ、先方からの反応はそれほど期待していませんでした。しかし、翌年になって、私が所属する海軍バンドが新しいユーフォニアムを購入することになった



愛用するウィルソンの TA2900 モデルを吹くボーマン氏。楽器は初めて手にして以来の状態のままだこもいじっていないという。

たことから、バンドの事務方にウィルソンの楽器が現状
どうなっているか確認するように頼んでみた。そうし
たら1976年に、私が提案したポイントをすべて改良し
た楽器が私の所に送られて来て、その6ヶ月後にはプロ

トタイプではなく完成品を受け取ることが出来たんで
す。以来、私とウィルソンの関係が始まりました。
——その時点でもう文句のない状態に仕上がってい
たのですか。

ボーマン いえ、まだ2、3の点で改良が必要でした。
改良点を挙げれば次のようなことです。4番ピストンの
位置を調整し、ハンドレストを手が小さい人でも持ち
やすいようにした。バルブガイドの作動音を軽減する

ためにナイロン・バルブガイドを採用した。ウォーターキーの形状も、水抜き穴をきちんと平らに塞ぐことで管の中を空気が淀みなく流れるようにした。ウォーターキーを3箇所配置することで、演奏中に素早く水抜きが出来るようにした。支柱の強度を高めるために、3つのパーツで組み立てていたものを一体型に変更した……ほぼ以上のような改良を加えながら、3〜4年後に本格的な発売に踏み切りました。

この時はまだDEGの社長のドン・ゲッツェン氏経由でやり取りをしていたので、ウイルソンのウィル・クラス氏とは面識がありませんでした。そんな状態が3〜4年は続いたかな。その前も他社から意見を聞かれ、アドバースをしたことはあったんです。だけど、どこもきちんと改良してくれなかった。ウイルソンはアーティストに寄り添い、吹く人のことを考えてくれるメーカーだと感じました。

もう一つ、ウイルソンのベルは1枚取りなので、音色に特徴があります。他社は2枚取りが多い。1枚取りの良い点は、より繊細な音を出しやすいことです。逆に言えば、自分の欠点がすべて聞こえてしまう（笑）。

——先ほどのナイロン・バルブガイドですが、その前は何か使われていたのですか。

ボーマン 金属です。だから作動音がとてもうるさかった。私が持っていたベッソンもそれが嫌で、前からナイロンのバルブガイドに変えていました。

——他社からはレスポンスが無かったのに、なぜウイルソンはボーマンさんのリクエストに迅速に応えたのでしょうか。

ボーマン 小さな会社だからでしょう。社長のクラス氏も優れた職人で、良い楽器を作りたいという熱意があったんだと思います。ウイルソンからはある時期、ベッソンのソヴェリンのようにラージベルを試したいと言われたけれども、ソヴェリンのラージベルはリードパイプがバストロンボーンと同じサイズで、音色が私の求め

るものとかかなり違う。そのため、ウイルソンには私が考える「True Euphonium Shank」（真のユーフォニアムシャंक）。ボーマン氏は力を込めてそう呼んだを採用してもらいました。それによつて私が持っていた昔のベッソンに近くて、さらに良い楽器……より良い音程感、より均一な音色、よりスムーズな吹奏感などが得られるんです。



「ウォーターキーの水抜き穴を平らに塞ぐことで、管内の空気が淀みなく流れるようにした」と話すボーマン氏。

ブライアン・ボーマン・サウンド

——元タイメージしていらつしたユーフォニアムのサウンドはどんなものでしたか。

ボーマン 私は小さい頃から3人のアーティストを聴いて育ち、それをお手本にして来ました。一人はご存知、レオナード・ファルコーニ。次がハロルド・ブラッシュ。彼は海軍バンドのソリストで、アメリカに4バルブのコンベ付きユーフォニアムを持ち込んだ人です。3人目がレイモンド・ヤング。彼はミシガン大学の卒業生です。ファルコーニは高揚感のある輝かしい音色を持っていました。力強く、いかにもイタリヤ人らしい音です。これに対してヤングは豊かで深い音色を持ち、ブラッシュは滑らかな音楽性やテクニクを持っていた。私はこの3人の「いいとこ取り」をしたのですよ。燃えさかる炎のようなファルコーニの情熱、ヤングの美しい深み、ブラッシュの音楽性と滑らかさ……これらをミックスして私のオリジナルの音、ブライアン・ボーマン・サウンドをつくり上げたのです。

私がウイルソンを吹くのは他でもない、私が理想とするこうした音を最も楽に再現してくれる楽器だからです。もちろん、他社の楽器を使ったとしても、1ヶ月もすれば私の音が出るでしょう。理想の音は楽器ではなく、私の頭の中にあるのですから。でも、それを一番楽に出せるのがウイルソンなのです。

最近になって、ユーフォニアムの音色のトレンドは変わって来ていると思う。テューバ奏者の下で勉強する人が増えたことが理由の一つでしょうね。そのために、ユーフォニアムが本来持っていたはずのテノール歌手のようなリリカルなサウンドが失われてしまい、テナーチューバに近いサウンドになってしまった。

ユーフォニアムでは、例えばバヴァロツティの歌声のようなイメージを持ちたいものです。ハイトーンや速く

ウイルソンに採用してもらったオリジナルシャंकこそ、私が求める「True Euphonium Shank」です。

今まであまり言わないようにして来ましたが(笑)、日本人には低音域が苦手な人が多いかも知れない。

吹く技術を磨くことも素晴らしいことですが、歌う心を持つことを忘れたくありません。なぜなら、どんな楽器でもサウンドの90%は人がつくるもので、楽器がつくる音は10%程度にすぎないからです。

——日本では若いプレイヤーでもハイトーンをパンパン鳴らせるようになっていきますので、逆に「低音を練習しろ」といわれる事が多く、意識はあんがい高音よりも低音に偏っているかも知れません。

ボーマン 私もそう言いがちな教師かもね(笑)。基礎練習では必ず低い音まで練習させます。いつも自分の出せる全音域を練習すること。低い音はより息が必要になります。とかく自分の得意なことばかり練習しがちですが、本当は苦手な練習に時間を割かなければいけない。得意な部分の練習は、練習ではなくリハーサルですよ(笑)。だから、自分の練習は誰にも聞かれないですね。苦手なところを苦勞してやるので、ひどい音がしているはずだから(笑)。

——一度聴いてみたいです(笑)。
ボーマン OH……!(笑)とにかく、苦手なポイントを書き出して練習リストを作ることをお勧めします。

真珠のネックレスのように奏でる

——アメリカや日本でこれまで多くの日本人を指導して来られましたが、日本の学生に共通する何か特有の特徴などをお感じになることはありませんか。

ボーマン これは今まであまり言わないようにして来ましたが(笑)、低音域がやや苦手な人が多いかも知れない。練習の正確さや理解力、演奏に向かう規律の良さは特筆されます。

——低音域が苦手ということは、体格や骨格なども影響していますか? それとも勉強法に問題がある?
ボーマン 低音域にそこまで注目していない、という

単純な理由じゃないかな。それよりも、正しくミスなく演奏することの方に意識が向かっている。もちろんそれは悪いことではないけれども、自分の音をよく聴いて歌うことが少し疎かになっているように思えます。

私はよく「パールのネックレスのようにフレーズを奏でなさい」と言います。日本の高品質のパールのように、音一つ一つの粒が美しい形と色で揃うように演奏を磨いて行くことが大切なんです。

——長年指導されて、最近になって特に若い人たちに伝えたいと思うことはありますか。

ボーマン 長く教えるほど、「どうやって演奏するか」を教えるより、「どうやって聴くか」を教えることの方が大切だと気付くようになりました。人の音はもちろん、自分の音を聴くこと。そして、自分の中から生まれて来る音やアイデアを、どう外へ聞こえるようにするのかを考えること。

頭の中ではあなたが理想とする素晴らしいユーフォニアムの音が鳴り響いているはず。美しい音色、素晴らしいテクニク、完璧な演奏……それを現実の自分の音と聴き比べてみましょう。一体何が違うのか……。そこを擦り合わせていくことが大事です。楽器はあなたの手の中だけで鳴っているだけでなく、頭の中でも鳴っているんです! そこにしっかりと耳を傾けてください。上達への近道は「聴く」こと。さらに言えば、「違いを聴き分けられるようになる」ことです。そうした耳を育てる事がとても大切です。

もう50曲以上のレパートリーを暗譜

——今回は「ウィルソンユーフォニアムフェスティバル2019」(1月18日、浜離宮朝日ホール)のゲストとして来日されましたが、プロのユーフォニアム奏者が沢山集まるこうしたイベントは、アメリカでも行われます

か?

ボーマン ITEA(国際テューバ・ユーフォニアム協会)を除けば、アメリカ全土をひくくるめたいイベントはないと思う。ただ、ITEC始め、ワシントンDCでは毎年1月末から2月頭にかけて軍楽隊のテューバ・ユーフォニアム・ワークショップが3日間行われます。ワシントンDCに集まる5つの軍楽隊、「アーミー・バンド」「アーミー・ワールド・バンド」「ネイヴィー・バンド」「マリーン・バンド」「エアフォース・バンド」はブレイミアンドと呼ばれ、アメリカでもトップクラスのプレイヤーが所属するバンド。そのメンバーたちが集まり、ユーフォニアム・クワイアーなどのアンサンブルを披露します。私も毎回参加して指揮したりしますが、誇らしいことに、ほとんどのプロフェッショナル奏者は私の教え子たちなんです。

——今回のフェスティバルのご感想は?

ボーマン 《ヴェニスの謝肉祭》を何人かが交代で演奏するのはとても面白いアイデアでしたね。あれだけの人数が吹いても、それぞれに目立つ場所がきちんとあつてバラエティに富んでいた。「紅白歌合戦」もとても楽しかった。要するに男性チーム、女性チームということですよ(笑)。(染野注)「レッド」「ホワイト」に分かれたのが新鮮だったよう。

——ボーマンさんのミニリサیتالでは全曲暗譜で演奏されていたのが印象的でした。いつも暗譜で演奏されるのですか?

ボーマン ほとんどの場合は暗譜で演奏します。

——暗譜が苦手という人も多いと思いますが、コツや練習法などは?

ボーマン 3種類のアプローチで取り組みます。まずは音、音程を歌えるようにする。次に、指使いのパターンを覚える。最後に、すべての音を紙に書き起こせるようにする。一番忘れてはいけないのは、自分のパートだけでなく、伴奏全体を覚えることです。まあ、一番の近道はくり返してトライすること。短い曲を週に1曲覚えるのも良い練習になりますよ。

耳を鍛えることも暗譜には役立つので、簡単なフレー



ズを全調で吹くのも効果的でしょう。私は5年生、10歳の頃からそんな練習をしていた。毎年短いソロを暗譜して発表会で披露しなければならなかったからね。そうやって演奏生活50年にもなるので、50曲以上のレパートリーを暗譜しています。積み重ねが大事です。

——大学を辞められた今、今一番なりたいことは？

ボーマン とってもいい質問だけど(笑)、まだどうするか考えていないのが正直なところ。息子家族が住むワシントンDCに移ることになっていて、その軍隊隊退官者がつくるバンドに参加するかもしれない。みんなプロですが全員ボランティアで活動しています。他には、プレミアバンドの元教え子たちがもう一度レッスンを受けたと言っているの、彼らのレッスンもするかも知

れない。どこかの大学で教えることもあるかも知れない。ひょっとしたら日本からも声をかけて下されば、教えに来ることがあるかもしれません。

いまの一番の楽しみは、3人の孫娘たちの隣に住むこと！ バレエやピアノレッスンの送り迎えもしないといけないかも(笑)。ユーフォニアムの練習は毎日できるだけしていますし、これからも続けるつもりです。